# 　　哲学とは何か？

# 哲学とは何か？　結論を先行する。

「言葉の遊び」である。

哲学者とは何か？

「言葉の遊び」をする学者である。

哲学徒とは何か？

「言葉の遊び」をする徒である。

哲学を学ぶ　と言うが

答えのない言葉遊びをすることで

答えのないことに意義を持たせ、

哲学顔と　お決まりのロダン顔で

深遠さを道連れに　写真に収まる。

このワザを生真面目に習得するプロ―セスが

「哲学する」となる。

言葉巧みに誘い　しかも

練り練りの　熟成のワザが必要となる。

距離を置いて眺めれば　深刻さあれど深遠さはない。

哲学者とか哲学徒が陥りやすい大穴は

「自分は間違っているかも知れないが

世間はもっと間違っている」への軌道の逸脱と思い込み。

こんなことを考えていると　彼らは

何が何だかわからなくなり　解を求めて焦り

かようにして　哲学の現場は

ヒマ人がヒマの有効利用を目指し

赴くままに　狭小な想像の世界で

言葉の遊泳に浸る　言語行動の一形態である。

その証拠に　時間ぎりぎりに

環境変化対応と　直観力が武器で

出たとこ勝負の人生と向き合っている女性族からは

古今東西　哲学者は輩出しない。

哲学は　ヒマな男性の専門領域である。

宇宙の何億光年の彼方を　日夜　新星を求めて

研究と観察をすると　自慢する天文学者に

ドラマではあるが　中村玉緒さん曰く

「先生は　ほんまに　ヒマな人どすなぁー」

新しい生命を宿し　育み　出産し

育児が定めの女性には

次世代へ　生命を引継ぐという

厳粛な使命を担っている身で

言葉の遊戯に　貴重な時間を割くヒマはない。

クサンティッペが　哲人気取りの夫ソクラテスに

我慢ならず　思い切り水をぶっかけたのは

女性として　妻として　正統派の証である。

人間には　父子家庭と母子家庭が存在する。

次世代へと育て上げた家庭こそ「聖家族」であり

賞賛に値する。

だが後世　「哲学」は言葉の遊戯と徘徊だけでは

自己の存在価値が矮小化され霧消するので

「学」という粉飾で動きだした。

人には　誰しも**「無垢な助走」**の時期があり

この時に「哲学」が入り込むと

この言葉遊戯で　加害者か　または被害者になる。

または　われ関せずのノン・ポリならぬ

ノン・フィロとなり　哲学から

賢くも距離をおく者もいる。

加害者は　やがて哲学をメシの種に他者に講釈し

被害者は　やがて自らの命を絶つ歴史さえある。

だが

世にはダマされたい迷える候補者に　人　欠かない。

加害者は　厳粛さを武器に、

下々（しもじも）と成り下がった彼らを

無抵抗へと厳かに誘導・教導する。

そのためには　被害者を安楽死へと誘う

奔放にして創造的な　テクニックの競演となり

外見の華やかさが　研究という名誉を担う。

かくして　哲学は　外見は他学と比肩できる

かのように見える。

学問と表現の自由が保障される国々で

哲学は生き延びる。

自由とは相性がよい　生き方なのである。

独裁国や圧政下では　抵抗するが窒息し

体制側も　取り込んで利用する場合も。

注目すべきは　哲学が羽振りを利かすと

その国は滅びたのが　歴史的事実ではないか？

さらに　哲学は他者の主観を排除しながら

自らの主観を主張する。

哲学の基盤は主観であり　客観性はない。

唯我独尊の世界である。

注目すべきは

「禅」は発祥の地の印度？から支那へ。

さらに日本へ渡り　さらに開花。

「土着禅」から　日本で「反芻禅」へと成長し

やがて　心ならずも　日本発の禅が世界へ。

この　Made in Japanの禅に

彼等　例えば　西洋人種は

宗教と見做さず　「哲学」の様相を見出し　心酔する。

ここに　イメージ哲学の開花となり

教導する日本の役割は大きい。

哲学は　言葉の遊びから脱却し

難解を避けて　夢と憧れを追求してこそ

生き残れる　ロマンの世界を構築すべき。